



東西しらかわ小学校長会 広報部

第 16 号 令和8年 2月 4日

発行人 会長 仁科 英俊

## 第54回福島県小学校長会研究協議会

## 安達大会発表を終えて

泉崎村立泉崎第二小学校長 笹山 美紀子

令和7年8月6日(水)から7日(木)までの2日間、二本松市において、「自ら未来を拓きともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を大会主題に掲げ、標記大会が開催されました。また、本年は、福島県小学校長会が発足して100年の節目となる記念すべき年であり、「福島県小学校長会100周年記念式典」も同日に開催されました。

1日目は、記念式典、開会行事、記念講演が行われました。記念講演では、前二本松市教育委員会教育長 丹野 学 氏より『「小学校長職」今までとこれから～東日本大震災の影響をふまえて～』と題したご講演を拝聴しました。東日本大震災やコロナ禍など、想定外の事態が続く中で、対応マニュアルの見いだせない学校経営の厳しさや難しさを実体験に基づいてお話いただきました。子どもを中心に据えた学校組織改革の必要性と経営者としての校長の自覚の重要性が示され、「学校の命は授業である」との言葉から、校長の果たすべき役割と責任の重さを改めて考えることができました。

1日目の夜は、各分科会会場ごとに、東西しらかわ地区の校長先生方と情報交換・懇親を深めることができ、大変有意義な時間となりました。

2日目は、10の分科会に分かれ、各視点に沿った研究発表と、それに基づく小グループでの協

議が行われました。私は第1分科会において、「目指す学校づくりのための組織・運営の活性化と校長の在り方」と題した矢吹班校長会の実践研究を発表させていただきました。このような発表の場をいただき、校長としての役割や学校経営の在り方について改めて深く考える時間となりました。

本研究は、先行きが不透明で変化の激しい時代にあっても、子どもたちが自らの人生を切り拓いていくために必要な資質・能力を育むことを目的に、学校経営・運営ビジョンを軸とした校長のリーダーシップの在り方を明らかにしようとしたものです。発表準備を進める中で、矢吹班各校の日々の実践を言語化し整理することにより、自校の教育活動を多角的な視点から見つめ直す貴重な機会となりました。

特に、「学校課題の可視化と共有」が教職員の意識に与える影響の大きさを実感しました。学校評価や児童意識調査、教職員の自己評価等を分かりやすく示すことで、感覚的に捉えられがちであった課題が具体的な数値や変化として共有され、教職員一人一人が自分事として受け止める姿が見られるようになりました。課題が明確になることで、解決に向けた話し合いの質が高まり、組織として前向きに動き出す力が生まれたことは、大きな成果であったと感じています。

一方で、課題も明確になりました。課題を把握し共有するだけでなく、「いつ・だれが・どのように」取り組むのかをより具体化し、確実に実践へと結び付けていく体制づくりは、今後の課題として挙げられました。また、学校経営・運営ビジョンについても、評価項目の精選や重点化を進め、より実効性の高いものへと改善していく必要があると考えます。

今回の発表を通して、学校経営は校長一人で進めるものではなく、教職員、家庭、地域と共に築いていくものであることを改めて実感しました。さらに、同じ志をもつ校長同士の横のつながりも学校づくりを支える力であると感じています。今後も対話と共有を大切に、組織力を生かした学校づくりに努めてまいりたいと思います。

最後になりましたが、この研究を共に進めてくださった矢吹班の先生方、そして、全面的にバックアップしてくださった東西しらかわ校長会の先生方に深く感謝申し上げます。

## 特別

## 地域あつての学校、学校あつての地域

矢吹町立中畑小学校長 金子 秀則

特別調査部長の大任を、昨年度より務めてまいりました。皆様からのこれまでの温かいご支援とご協力に対し、心より感謝申し上げます。

さて、福島県小学校長会には、行財政部、研究部、生徒指導部、広報部と、4つの専門部が置かれています。一方、東西しらかわ小学校長会の専門部は5つであり、前記に加えて特別調査部が置かれています。他支会にも同様にあるのかは分かりませんが、特別調査部は、県の組織にはない、東西しらかわ独自のものということになります。平成30年度より前に部長を務められた先輩のお話を伺ったこともあるので、特別調査部は、東西の小学校長会が統合される前から、その必要性によって特別に置かれていたものなのでしょう。

部の名称となっている“特別”な“調査”とは、年に数回ある県小学校長会理事会の研修課題を踏まえた、事前提出資料作成への協力を指していると思われまます。県の会長名での依頼文書は、各支会長宛てに送られますが、この資料を支会長が一人で作成するとなると、各校長先生方による多様な取組や考えを反映させることが難しく、内容が限定的になりかねません。あくまでも「支会としてのまとめ」にするために、特別な調査を広く実施し、集約して資料を作成する役割が必要だ、ということで、本支会の先輩方は“特別調査部”を独自に立ち上げたものと推測します。

研究部担当の範疇にない研修や講演の企画等、特別な仕事は他にもあるのですが、調査の取りまとめは毎回容易ではありません。しかし、各校長先生方の、課題の捉え方、取組や考え、書きぶりなどから学ばされることが非常に多く、その特別感をいつも味わわせていただいております。

感銘を受ける文に出会うと、それを書いた人のような特別な存在になりたいと思われまます。そんな時、パティシエである杉野英実さんの「当たり前を積み重ねると特別になる」という言葉に触れました。基本的なことを疎かにせず、忠実に、継続しながら、今後も校長の職、特別調査部長の役を務めさせていただく所存であります。

どうぞよろしく願いいたします。

矢祭町立矢祭小学校長 太田 徹

9年前、私は、閉校を迎える伊達市立山舟生小学校に勤務していました。当時全校生は12名でしたが、地域をあげての大運動会や数々の行事など、地域と子どもたちが一体となつてともに時間を共有する、とてもすてきな学校でした。中でも、小さな木造の体育館を埋め尽くすほど大勢の方々をお招きしての閉校記念式典の様子は、今でも目に焼き付いていています。地域の方々の笑顔や涙を目にして、私は、「地域あつての学校、学校あつての地域」ということを強く実感したのを覚えています。

現在、私は、矢祭小学校3年目となりました。本校は、町内5つの小学校(東館・下関河内・関岡・内川・石井)の統合を経て、今年度、開校十周年を迎えました。この大きな節目を祝い、本校の校歌を作詞・作曲してくださった世界的指揮者、小林研一郎氏をお迎えし、教育委員会主催による「矢祭小学校開校十周年記念コンサート」が盛大に行われました。小林氏の情熱あふれる指揮により、子どもたちと地域の方々と一緒に校歌を斉唱するという夢のような機会となりました。また、この式典に合わせて、開校十周年の記念誌を制作しました。歴代のPTA会長や校長先生方、卒業生からお寄せ頂いたメッセージには、矢祭小学校に対する熱い想いや願いが込められていました。今ある矢祭小学校は、今日までのさまざまな方々の想いや願い、苦労や努力によって築き上げられたものだということを改めて実感することができました。

9年前の小さな学校の閉校、そして、本校での開校十周年記念。私がつくづく感じたことは、子どもたちは、保護者や地域の方々、そして、これまでに関わってくださったたくさんの方々の想いや願いに支えられ、今を歩んでいるということです。そうした想いや願いに少しでも応えられるように、子どもたちと職員、保護者や地域の方々と向き合っていかなければと思います。人と自然に恵まれたすばらしい矢祭という地で、地域とともに、未来を担う子どもたちのために力を尽くしていきたいと思ひます。

## 幼小連携

白河市立釜子小学校長 唐橋 浩二

幼小連携の重要性については、結構前から言われ続けています。私は、担任の期間が長く、それもほとんど高学年の担任だったということもあり「小1プログラム」より、目の前に迫っていた「中1ギャップ」の解消のために小中連携の方にだけ興味関心がいっていました。いざ、校長になり、幼稚園主催の幼小連携会議に出席したり、運動会等の行事や普段の活動を参観したり、卒園式に来賓として出席したりするうちに、幼児教育から小学校教育への移行期の環境の変化の大きさに気づきました。そして、それよりも、来年度入学してくる年長組の園児達は私が思っている以上にいろいろなことができるし、着実にいろいろな力を付けていることに驚きを感じました。今まで幼児教育のことを知ろうとしなかった自分自身を反省するとともに、何もできないものとして、何でも上級生等にやってもらうなど手厚い支援を受けている1年生の姿に多少の違和感を感じました。

小学校は、幼児教育での育ちや学びを基礎として、その上に学びを重ね、広げていかなければならないので「このまま何も知らないままではまずい。」と思い、先生方も巻き込んで次のようなことを実施してみました。

まずは「百聞は一見にしかず」なので、全担任と養護教諭で幼稚園の普段の活動の参観に行かせてもらいました。次に「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」と幼稚園が作成した「架け橋プログラム」について、校内研修で取り上げ先生方に周知しました。今後は、幼稚園年長組の発表会の姿(動画)を先生方に見てもらう機会をつくることと、幼稚園の先生方の小学校での給食体験(配膳も含む)を実施予定です。

幼稚園では、育む資質・能力が小学校でどのように育つのかを見通し、小学校では、幼稚園で育まれた資質・能力を踏まえてスタートさせることと、小学校で育む資質・能力が中学校以降にどのように育つのかを見通すことが必要だと思えます。そして私たちはこのような連続した教育の中で日々の教育活動を行っていることを自覚していかなければいけないなと思いました。

## 私を支える言葉たち

白河市立表郷小学校長 佐藤 康二

30歳を迎えた時、当時は定年が60歳だったので、自分が生まれてから生きてきた30年間と同じだけの時間を、これから教師として生きていくのかと思ったら気が遠くなったのを覚えている。

若い時、同僚から、「康二先生は、教頭向きではない、校長向きだね。」と言われた。なかなか鋭いと思った。正直、多くの文書を的確に処理し、計画的に仕事を進め、関係機関ともうまく連絡調整するような仕事は苦手だった。だが、教頭になり、その学校を転出する際に、同僚の先生から「佐藤教頭先生は、校長先生とも距離が近くて、先生方とも近くて、そして、子どもたちとも近かったですね。」と言われ、うれしかった。若い時、同僚と飲みながら、今の学校をどんな学校にしたいか、という話をよくした。毎回、その話題の最後の結論は、「自分の子どもを通わせたい学校」だった。校長になり、何度となく、このことは思い出され、どこかでそれを意識しながら、仕事をしてきたように思う。教頭になる前、筑波で研修を受けた。その研修の中で、架空の学校行事で事故が起き、その記者会見を、校長として体験するという実習があった。事故の説明の後、実際の新聞記者から質問を受けた。そこで、私の校長としての責任問題を追及され、しどろもどろになってしまった。無難にその場を乗り切ろうとした結果だった。後からどうして堂々と、「全ての責任は私にあります。」と答えられなかったのか、自己嫌悪に陥った。その時に、思い出した言葉があった。それは若い時、その学校の校長先生から指導された言葉。「教師だって人間だから、完璧ではない。間違えることもある。そういう時に、失敗を取り繕うのではなく、潔く認め、謝罪することは、決して恥ずかしいことでも、駄目なことでもない。失敗したり、間違えたりした時は、こうするのだという姿を、子どもに見せるチャンスではないか。」大切なのは「潔さ」と諭されたのだった。

これまでの人生の中で、その時々、出会ってきた言葉たち。きっと、これからも支えてくれるのだと思うのと同時に、私が発した言葉が、どこかの誰かの支えになっていたらいいなと思う。

## 学校は、子どものものである

白河市立小野田小学校長 関根 敦子

今から30年ほど前、私はK小学校で、2年生の担任をしていました。指導主事を招聘して校内研究会を行うことになり、私は繰り下がりのあるひき算の授業(13-9)を行いました。子ども達に既習との違いに気付かせ、半具体物を使い、繰り下がりの意味理解を十分行えた授業、自分では「うまくいった」授業でした。

けれど事後研の指導は、真逆のものでした。「子どもの声に寄り添っていない、教師主導の授業であった」このような厳しい指導内容だったと記憶しています。自己評価とは真逆の内容に大変驚くと共に、その意味するところを理解することができませんでした。

その日の夜、何を指導されたのか深く考えました。「学校は、子どものものである」校長先生からご指導いただいたこの言葉の意味するところを、自分に問いかけ続けました。そして授業導入時、子どもが発した「4だよ!」という言葉がなかったことのように授業を進めていた自分の大きな過ちに気付きました。(当然の指導でしたが、30年前は全くその視点がない自分でした。)

「学校は、子どものものである」その日からこの意味するところを追いかけてきました。「子どもを主語とする学校」教師としても、そして管理職の立場となってもゴールのない問いとして、追い求めてきました。「学校は子どものもの。では、子ども達の指導の最前線に立っている先生方が子どもに寄り添える学校をどうすれば創ることができるのか」

管理職を拝命してからは、子どもを主語として考える教師の在り方、そして子どもと関わる時間の確保を目指し、働き方改革も推進してきました。「単に削減するばかりでは、学校は子どものためになっているのか、子ども達の自己実現に向けた教育活動となっているのか」日々問い続けてきました。

今年度、役職定年の年を迎えました。「追い求めてきた結果はどうであったのか。子どものためとなっていたのか」

「追い求め、問い続けることこそが、答えであったのではないかと、気付く自分がいます。

## サポーターティブ・クライメート

西郷村立熊倉小学校長 山川 晃司

私の初任地は、会津北部の山間にある小規模の小学校でした。当時でも古さを感じた木造校舎は、板張りの床の所々に穴が開いていて、児童の鉛筆や消しゴムがその穴に落ちてしまうことがよくありました。猫の額ほどの校庭と農道がフェンスで区切られており、ボールを蹴った児童の靴が脱げてフェンスを越え、走ってきたトラックに載って行ってしまったことがありました。そのことを伝えに来た児童に対して私が「荷台に載っちゃったのか?」と聞くと「1台です。」と答えた児童との漫才のようなやりとりを今でも覚えています。

そんな昭和ノスタルジック満載(実際に昭和でした)の学校では、学級活動(話し合い活動)の研究を行っていました。当時の私は、そのねらいもよく分からないまま、先輩方の実践を見様見真似で学びながら実践を積んでいたように思います。

それから30年以上が経って校長職に就く前に、尊敬してやまない先生から「学級における支持的風土の醸成」の大切さを何度も教えていただきました。その言葉を聞く度に初任時代の実践を思い出し、そこで目指していたものの大切さを強く感じるようになりました。VUCAの時代を生き抜く力を育む新たな教育の在り方が重要視されている現在でも、ずっと変わらない教育の不易の部分脈々と受け継がれていること、そしてその一つが「支持的風土」であることを確信しました。

このような経験を基に、校長職となってから最も大切にしてきたことが子ども達が属する学級の風土だけでなく職場環境までも支持的風土にすること、いわゆる「サポーターティブ・クライメート」な学校づくりです。子ども達が、そして先生方が、失敗を恐れず、互いを認め合い、安心して「素」の自分を出せる場所、そんな温かな空気感こそが学びの質を高め、困難に立ち向かう勇気を育むと信じて学校経営を行ってきました。

私の学校経営の実践は、「サポーターティブ・クライメート」の風をほんの少し吹かせただけに過ぎないかもしれません。しかし、その微風がこれから大きくなって、ずっと本校に吹き続けることを願っています。

## 本物と出会う

西郷村立小田倉小学校長 関根 隆

子どもたちにとって「本物と出会う」ことは大きな衝撃であり、心の成長に大きな影響を及ぼす出来事となるという信念のもと、校長の任を務めてきました。役職定年を迎え、今でも10年前、新任校長として只見小学校に勤務した頃のことを思い出します。「只見は、春夏秋は最高、冬は最悪」と誰かの言葉をいただいて着任しました。

その頃の只見町では、子どもたちの「只見愛」を育み、持続可能なまちづくりを目指してESD教育に取り組んでいました。

私は、子どもたちの「只見愛」を育むために、本物体験を核とし、地域住民を巻き込んだESD(海洋)教育に取り組むことにしました。春には、全校生で雪解けが進む田子倉湖をモーターボートに乗り、大雪溪の下をくぐりました。また、6年生の修学旅行では劇団四季でライオンキング鑑賞を取り入れました。只見町をPRするパンフレットを作り、上野公園で配布する取組をしました。夏には、日本二百名山の浅草岳を地域の山岳会と保護者の力を借り、高学年と登りました。そして頂上からは、只見川が注ぐ日本海を望みました。秋には、国交省の許可を得て、建設中の国道289号線を全校生で通過し、日本海まで出かけ地引き網体験をしました。冬には、海洋教育の指定を受けていた東京大学に6年生と出かけ、総合的な学習の成果を子どもたちが堂々と発表しました。このような本物体験を通して、子どもたちといつも話していた合い言葉は、「只見って本当にいいところだね」でした。

そしてこの10年間、できる限り子どもたちに本物と出会う機会を設けることに努めてきました。本物と出会った子どもたちの瞳は本当にキラキラ輝き、出会った喜びや本物への憧れを強く抱いていることが伝わってきます。ライオンキングを見てきた子どもの中には、その後、実際に劇団四季の俳優を目指すに至った子どもさえもいました。

さて、今年の「本物と出会う」の仕掛けは、3月2日(月)に計画している6年生の大ゴッホ展です。子どもたちにどんな成長をもたらしてくれるのか、とっってもとっっても楽しみです。

## 「必然」への感謝を胸に

中島村立滑津小学校長 柳沼 典正

3年前の4月に行われた「新任校長研修会」。その最初の講話「新任校長に期待すること」の冒頭で、講師の先生がお話しになった言葉が強く印象に残っている。

「汝 何のために 其処に在り也。」そして、「今の学校に勤務しているのは、決して偶然でなく、必然である。」

この言葉を耳にした瞬間、身震いがしたのを、今でも覚えている。

滑津小には、以前、教諭として勤務したことがある。当時はまだ30代と若く、担任をはじめ体育主任、生徒指導主事、教務主任を仰せつかり、教員としてのスキルを高めることができた学校。そして、創立130周年を迎えた際は、教務主任として、式典等の企画、準備、運営を保護者、地域の皆様と一緒に進めた思い出一杯の学校。

あれから20年後、滑津小に校長として赴任し、昨年度、創立150周年を迎えた喜びは、何ものにも代え難く、言葉にできないくらいのうれしさと共に、「決して偶然でなく、必然」であることへの感謝の念を強く抱いている。長い教員生活の中で、私の一番の思い出となっている。

さて、数年前であれば、60歳を迎えた今年の3月末で定年退職であったが、時代の折、定年が63歳まで延びた。微力ながら来年度以降も福島県の子どものために尽力できたらと思っている。まさに、教員生活の集大成の3年間になると感じている。

走ることを趣味としている自分で例えるなら、フルマラソンの38km地点というところか。ゴールまで残り5kmを切り、最後の頑張りどころ。「ここからが本当のフルマラソン」と奮い立たせ、自分自身との真剣勝負。まさしくラストスパート。

そして、「決して偶然でなく、必然」であった今までの教員生活でお世話になった全ての皆様への感謝の思いを胸に、最後まで走り切りたいと思っている。

最後になりますが、東西しらかわ小学校長会の皆様には、現場の様々な課題を共有し、支えていただきましたことを、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

## 1メートル隣の席から見る景色

## 我以外皆我が師なり

矢吹町立善郷小学校長 原田 知幸

私は大学卒業後、両親の都合で福島県に来ました。福島県には、友達も先輩も後輩も恩師も誰もいない、私にとってまさに縁もゆかりもない土地でした。それが5年後には、何かの縁に導かれるように県南に根を下ろして今に至っています。教員生活の約7割の期間、私はこの県南で教員として育てていただき、お世話になってきました。(高校駅伝の日本一、高校サッカーのベスト4入り、福島市出身の若元春・若隆景の活躍を心底喜んでいる自分を今では立派な“福島県民”であると自負しています。)

平成元年からの教員人生を振り返ると、長いようであっという間でした。

50代を目前に、教務主任として日々の業務に追われていた頃の私は、管理職になることなど全く考えていませんでした。ある時、先輩からこんな言葉をかけられました。「あなたから1メートルも離れていない隣に座っている教頭先生の席から見えている学校の景色は、あなたが見ている学校の景色とはまったく違う。その景色を見てはじめて、教員としての深みが増す。」私は、その一言に心が動きました。学校の「違う景色」を自分の目で見てみたいという好奇心が芽生えました。

新任教頭としてスタートした4月当初の日々は、1人職員室に居残り、警備会社からの施錠確認の電話で日付が変わったことに気づくような有様でした。確かにこれまでとは全く「違う景色」の一種だったことは生涯忘れることはないと思います。「違う景色」の本当の意味は後々分かってきました。

管外での新任校長を経て再び県南に戻った際には、皆様から「お帰りなさい」と温かく迎えていただきました。東西しらかわ小学校長会の「県南はひとつ」という合言葉に励まされ、またそのつながりに心強さを実感しながら今日までやっていくことができました。

これまで出会った子供達、保護者、地域の方々、そして先生方との出会いやつながりは私の財産となりました。そのすべてに感謝しつつ、次の「景色」に向かって歩み出したいと思っています。本当にありがとうございました。

泉崎村立泉崎第一小学校長 吉田 衛

『宮本武蔵』や『三国志』で知られる作家吉川英治氏の言葉です。私たちは「師」というと、先生や先輩を思い浮かべがちですが、武蔵は「人は皆、何かを教えてくれる存在であり、時には敵さえも師となる」と語っています。この視点に立つと、世の中の見え方が大きく変わります。自分とは異なる意見の中に、「なぜその人はそう考えるのか」と考えること、自分を批判する言葉の中にも、気づきがあると受け止めること。学校や本だけでなく、日々の暮らしそのものが教科書であると、今あらためて感じています。役職定年を迎えますが、私自身、まだ学びの途中にあります。子どもの無邪気な姿に、忘れていた純粋な気持ちを思い出させてもらい、思うようにいかない出来事からは、次への工夫や備えを学んできました。すべての人、すべての出来事が「師」となり得るという視点を、これからも大切にしていきたいと思えます。

コロナ対応、働き方改革、さらには生成AIの急速な進展など、学校を取り巻く変革の波が一気に押し寄せてきたように感じます。そのような時代の中で、私が押しつぶされることなく、無事に務めを果たそうとしてこられたのは、共に悩み、共に考えてくださった校長会の皆様、そして多くの諸先輩方の存在があったからにほかなりません。若い頃はがむしゃらに日々を過ごし、その意味を深く考える余裕もありませんでしたが、教諭時代には「子どもを信じ続けること」、教頭時代には「教職員を守り、任せること」、校長としては「学校を整え、地域とつなぐこと」等を大切にしてきたように思います。特に校長としての9年間は、重圧に押しつぶされそうになることもありましたが、同じ立場で日々奮闘される校長先生方からの励ましや助言に、幾度となく救われました。課題に直面したとき、視点を変えることで新たな道が見えてくる。そのことを、周囲の先生方から多く学ばせていただきました。役職定年という一つの節目を迎えますが、今後は地域の一員として、引き続き学校を温かく見守り、応援してまいります。これまでご一緒させていただいた教職員の皆様、校長会並びに関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。